

アドラー心理学における諸問題(2) 理論と思想の接点～ギリシア哲学の視点から[1]

岸見一郎(京都)

要旨

Some problems concerning Adlerian Psychology(2)
from the viewpoint of Greek philosophy.

In this paper, the author tried to ascertain if Sicher's trial of making a compromise between individualistic goal striving and altruistic concepts such as Gemeinschaftsgefühl is successful or not from the viewpoint of Greek philosophy. For this purpose the author, introducing the history how the atomic theory came into being, indicated the points at issue about the understanding of nature by the atomic theory. Based on this consideration it was made clear that in the case of human action declination is caused by our creative power and that science advocated by Adler must be something completely different from natural science. Adler's science, that is, individual psychology is not reductive, causal, but teleological.

キーワード :

1. はじめに

本稿は、前稿を受けて、ジッハーの個人の目標追及という自己中心的な概念と、共同体感覚という利他的な概念との折り合いをつける試みについて、哲学、とりわけギリシア哲学の見地から考察する。

そのために本稿では「自由意志」の問題を手がかりとして考察したい。原因論は原因が原因に必然的な仕方で無限に続くという意味で人のなす誤りすら必然であり、つまりは他のあり方の選択の余地がない決定論になってしまうが、なんとか「自由意志」をいわば救わなければ、伝統的な育児や教育における、諭すこと、戒めること、叱ること、罰すること、また、アドラー心理学における、勇気づけに基づく教育、育児、さらにはそもそも人が生きることすら意味がなくなるように思う。なぜなら人は必然によって今のあり方以外のあり方をとりようがないことになれば、本人の責任を問うことができないからであり、今とは違うあり方へと人を導くことを意図したこれらの働きかけは自由意志を前提としなければ意味を持たないからである。

アドラーは1912年に「個人心理学」(Individual-psychologie, individual psychology)という言葉が著作の中で用いた時に、病理学者であるとともに社会医学の先駆者でもあるルドルフ・フィルヒョウ(Rudolf Virchow)を引いている¹⁾。これは、フィルヒョウの「原子と個人」(Atoms and Individuals)という論文からの引用であるが、atomもindividualも共に元々(前者はギリシア語、

後者はラテン語)「分割できないもの」という意味である。atom が自然科学に属するのに対して、後者の individual は、生の科学 (life science, science of life) に属する、とされる。アドラーはこのように個人を原子との類比のもと、個人は「生きることの科学」(science of living) である個人心理学が扱うというふうに考える²⁾。

この個所でアドラーが引いているフィルヒョウの論文が示すように³⁾アドラーの心理学の大きな特徴である目的論のモデルを医学に求めている。ここでアドラーが示そうとしているのは、個人心理学が同じ科学を標榜していても、その内実は違うということである。以下、本稿においてはこのことを明らかにするために、(1)アドラーが個人と対比している原子について、古代ギリシアの原子論の成立とその背景を見(1、2、3節)、(2)原子論的な自然理解に伴う問題点を指摘した上で(4、5、6節)、(3)この考察に基づいて、ジッハーのいう水平面での進化の比喩によって、人の行動をどのように理解すればいいのかを考察し(7、8節)、最後に全体をまとめてみたい(9節)。

2. 原子論の成立

古代ギリシアにおいて原子論が成立した背景を簡単に振り返っておきたい。ギリシアの自然哲学は、例えば、タレスを初めとする一派は、万物の根源(アルケー、arche)を立て、その生成変化によってA→B→Cというふうに他のすべての自然物を説明しようとした。この最初のAを何であるとするかは、哲学者によって異なったが、AがAでない別の何ものかに生成変化することは自明のこととされた。

しかし、エレア派のパルメニデス(前475年頃)は、ものは<ある>か<ない>かであり、また、<ある>ものは<あり>、<ない>ものは<ない>のであって、<ない>ものが<ある>とか、<ある>ものが<ない>ということは決して許されない、といった。

生成消滅の自明性は、ここにおいて崩壊することになった。なぜなら、一つのものが他のものへと変化するということは、Aとして<ある>ものが<ない>、そしてBとして<ない>ものが<ある>ということの意味することになり、パルメニデスの論理を受け入れる限り、生成変化は不可能であるということになるからである。

そこでパルメニデス以降の哲学者たちは、パルメニデスの論理に照らして自然を説明することを余儀なくされた。エンペドクレス(前444年頃)は、火風水土の相互変化を否定、四元の独立を認め、自然の多様をそれらの変化ではなく「混合」と「分離」によって説明しようとした。

さらにアナクサゴラス(前500-429年)は、現存のすべてのものは、いずれも生成変化したことの無いもので、原初からすべて存在していたのだ、といった。無限に多くのものが独立に存在しており、万物は万物から成り立っている、というより他はなく、一元的な説明を放棄した。

レウキッポス(前440年頃)、デモクリトス(前420年頃)の原子(アトム、atomon, atom)論は、以上の困難を克服し、自然の一元的説明を回復するものであった。原子の一つ一つは性質を一切持っていないが、いくつかの原子が集合して現実の事物を形作り、原子の形の違い、配列の違い、向きの違いによって、見かけ上の感覚的性質の差異が生じてくる、というふうに説明した。一様な原子をもって多様な自然現象を理解しようとしたのである。

3. 原子の運動における逸脱

ところが、プラトン、アリストテレスの時代から半世紀以上下ったエピクロス（前 341-270 年）の原子論においては、原子の運動は違ったふうに理解された。レウキッポス、デモクリトスの原子論では、自然の森羅万象は、いくつもの原子を構成要素として、その集合と離散によって説明された。この原子の集合離散はあらゆる方向への直線的で機械的なものである。

ところがエピクロスの原子は基本的にはこのように機械的な運動をするのではなく、地球の中心と同じ方向へと直線運動をする。このような考え方の変化の背景にあるのはアリストテレスの哲学である。エピクロスはデモクリトスの考えを受けながら、かつアリストテレスの哲学を通過することでその影響を受けることになった。

すなわち、アリストテレスにおいては、ものには固有の場所があり、そこに向かってものは動いていくというふうに考えられている。そこで原子はもはや機械的に動くことはできなくなったのである。

しかし、ここに難問が生じる。もしもすべての原子が一定方向への直線運動をするのであれば、レウキッポス、デモクリトスの原子論において試みられたような、個々の原子は一様であるが、それにもかかわらず多様な現象が生じることを説明することを可能にする原子相互の集合離散が不可能になるからである。

そこで、本来虚空間の中を原子は必然的な法則に従って直線運動をするのであるが、時にわずかに進路から逸れることがあるとされる。これが原子論の創始者であるレウキッポスやデモクリトスと顕著に異なる点である。「逸脱」(clinamen)を想定することで、原子相互の衝突が起り、その結果複雑な現象を説明することができることになった。

しかし問題は単に複雑な現象を説明するというにとどまらない。エピクロスは原子論を採るのだが、他方、強烈なモラリストだったので、そのことと自身の原子論との調整をはからなければならなかったのである。

今日エピクロスの書いたものは若干の書簡を別にすれば大半が失われているが、間接的な資料は比較的豊富にあり、ことに紀元前 1 世紀のローマに生き、おそらく 40 代の若さで死んだという他のには何も知られてないルクレティウスという詩人の残した全 6 巻の『事物の本性について』(De rerum natura) がエピクロスの思想を伝えている。

エピクロスが必然の運動からの逸れを想定しなければならなかったのは、自由意志を救わなければならなかったからである。実際、自由意志 (libera voluntas) という言葉がルクレティウスのこの書物の中で「宿命の掟」(fati foedera) という言葉と対比されて用いられている。「もしすべての運動がいつもつながっていて、古い運動から新しい運動が一定の秩序で生じるとするならば、もしまた原子がその進路から逸れることによって、宿命の掟を破る新しい運動を始めるということがなくて原因が原因に限りなく続いていくとするならば、地上の生物のもっている自由な意志というものはどこから現われ、いかにしてこの自由意志は宿命の手から解放されたというのか」⁴⁾

このような問題意識は直接にはレウキッポスやデモクリトスの断片に見出すことはできないが、エピクロスの原子論が、レウキッポス、デモクリトスのそれに伏在していた、と考えることができる。実際、デモクリトスも原子論的自然学だけに興味があったわけではなくて、その断片はほとんどがモラルに関するものである⁵⁾。

4. 原子論的世界観の問題点

問題は、エピクロスがこのように原子の動きの中に逸脱を認めることが自由意志を救うための根本的な解決にはなっていないということである。

必然の流れに抗する逸脱は偶然であるが、自然はすべて必ず法則に従った必然のものであるとしても、人の行為というものは「なぜ？」という問いによって「原因」をどれほど見つけようとしても、人の意志は必ずその原因をいわばすり抜けてしまう。偶然のように見えても本当の原因が知り尽くされていないだけであって、実は偶然ではないのだというふうに、偶然をすべて必然の中に解消させることはできないように思える。

そこでエピクロスは逸脱という概念を導入することによって、本来的な必然の動きの中に例外を認めたのであるが、もともとは必然しかありえない中、自由意志を救うために逸脱という現象を認めてみても、体系としての一貫性を考えるならば破綻としかいいようがないと考えることもできる。

エピクロスの原子論においても、その世界観においては基本的には意志の自由の存在余地はない。逸脱の概念はいわば取ってつけたものであるという感を否めない。自明でヴィヴィッドに思える意志の自由を否定することは、ちょうどあらゆる感覚的性質を否定することが不自然であるように、無理があるように思われる。

デモクリトスは、「甘いといい、辛いといい、熱いといい、冷たいといい、また色彩といい、それらはすべてノモス（習慣、約束事）の上のことに過ぎない。真実にはただ原子と虚（空虚、虚空間）があるのみ」といっている（断片9）。世界のあり方の「真実」の基礎は、ただ原子と、原子がその中を運動する（または原子と原子を分け隔てる）虚空間だけであり、われわれが知覚する味とかいろいろなものはすべて「真実」には存在しない。そういったさまざまな知覚的性質は、原子の集合体（物体）において、その一つ一つの原子の形や向きや配列などの結果としてわれわれの五感に現れてくる「仮の」の姿にほかならない、と考えている。

ここで問題にしている自由意志についていえば、それを容認するためにはそもそもこのような原子論的な世界観そのものに何か問題があるのであって、世界の見方として究極的に正しいのかどうかということを再検討していかなければならない。この世界観に若干の変更を加えるという仕方では、エピクロスはそのような方向での試みを行なったが、自由意志を救うことはそもそも不可能でないか。

5. 西洋近世における自然理解

先に見たようにエピクロスの原子論はアリストテレスの哲学を通過したために古代の原子論とは異なるものになっている。そのアリストテレスの目的論的な自然観に反対して17世紀のガリレイやデカルトは生物学的な見地の自然学に反対し、完全にアリストテレスの自然観を否定するところまでは至ってはいないとはいえ、デモクリトスの原子論を直接引き継ぐような数学的、機械的な自然観を提唱した。

実は古代ギリシアにおける自然の探求の伝統が、西洋近世において確立された時、源流において提出された自然理解の方式の中から一つの意識的な選択があったのである。それは要素還元主義と呼ばれるもので、「ものとその時空内での配置と運動」という基本的な図柄に基づき、「もの」的粒子（原子）を究極の単位とする見方である。世界の基礎にはもの（物質）があり、その物質、あるいはその構成要素が瞬間瞬間にさまざまな配置を形作りながら全空間に広がっていくということ、このことを世界、自然における究極的な事実と見なして前提とする世界観である。この古代ギリシアの原子論にもとづく世界観があまりに自明になっているので、それ以外の世界観選択の余地はないように思えるほど日常的思考において自明となってしまう。

デモクリトスの原子論は、多くの科学者によって、実験的な裏付けを与えられ、1803年にドル

トンの化学的原子論において一つの安定した秩序を表現するかのように見えたが、やがてそれが字義通りのアトム（不可分なもの）ではないことが知られるようになり、素粒子へと解体していくようになったということ、また、次稿で考察することになるプラトン哲学が正当に理解されるにつれて、現代の物理学はデモクリトスの考えよりはプラトンの考えに近いとまでいわれることがあるにもかかわらず、「ものとその時空内での配置と運動」という世界観は揺るぎのないものになっている。

6. 日常生活からの遊離～価値の欠落

問題はこのような世界観が正しいとしても、原子論的な世界はわれわれがその中で日々生き、かつ対処していかなければならない世界とはまったく関わりのないものといわなければならないということである。たしかに科学的な思考はわれわれの生存と行動のための便宜性と有効性を持つけれども、このような「ものとその時空内での配置と運動」という見方を固定してしまうと、われわれにとってヴィヴィッドに感じられる多くのものがこの世界で存在しえなくなることになる。

このような要素還元主義に立つ自然科学的世界観においては、先に引いたデモクリトスの断片から知られるような、価値や目的、感覚といったものはすべて欠落することになるか、あるいは、それらが大きな所与である以上、この欠落を補うために、ものの世界とは独立に想定される、すなわち二元論となるかのいずれかである。

先にも言及したデカルトは、*res cogitans*（思惟するもの）[思考、認識主観、自由意志、情念、価値の選択 / 主観的] と *res extensa*（延長を持つもの）[延長の実体 / 客観的] という対比をした。没価値的ということが客観的、また認識の主体や、本稿で問題にしている自由意志や価値を優先的に立てることを主観的と見るのである。二元論的な世界観においては、客観的事実の世界は、人間が生きる価値の世界を何ら説明せず、後者は前者とは何の関わりも持たないことになる。

この価値の位置づけの問題については慎重に検討しなければならない。

7. 人間の行為における逸脱

次に、アドラーがいう個人を扱う *life science* としての個人心理学について考察する。ジッハーは、既に見たように、人は進化するが、「前」へと動くことを基本に据え、それ以外の動きを「逸脱」といつている。このような「逸脱」がなければ、ちょうど先に見たエピクロス原子論において、もしもすべての運動が本来的な直線運動であれば多様な現象を説明することはできなかったように、変化あるいは進化はありえないことになる。蟻や蜂の社会においては、同じようにすること（*conformity*）が基礎にあるから少しも変化することはなく、したがって進化するということがなかったのに対して、人間の社会では逸脱があるからこそ進化があると考えることができる。

既に見たように、ジッハーによれば前に進むのはノーマルな精神的な健康の方向であり、逸脱は神経症の兆候であると見ているが、逸脱が進化を促すことがあるとすれば、逸脱は常に否定的に見られる必要は必ずしもなく、いわば「正の逸脱」を認めることは可能であろう。

8. 両者の逸脱の意味の違い

このような逸脱は、エピクロスの原子の場合は、偶発的に起きるわけだが、人の場合は、意識的、無意識的であるかは別にして、選択がなされる。

この場合の選択というのは、ある行為が自分にとって利益をもたらすかどうかについての判断である。既に随所で明らかにしてきたので⁶⁾ここでは詳細には繰り返さないが、「誰一人として悪を欲する人はいない」⁷⁾、あるいは、何人も善を欲しているとプラトンがいう時、この「善」は「ためになる」という意味に他ならない。そこで誰も自分のためにならないことをしないということになるが、実際には、自分のためになることをするという目的を達成するための手段の選択を誤ってしまう。

このように選択を誤ることによって人は本来の前への動きから逸脱するのだが、そもそも逸脱を可能にするのは、自由意志であり、アドラーの言葉でいえば個人の「創造力」(creative power)である⁸⁾。存在的面(existential plane)だけでなく本質的な面(essential plane)に生きる⁹⁾人間にとって、創造力は単なる生存のレベルを超えて人生の本質的な面において生きることを可能にする。行動の目的は、常に個人によって創造されるものであり、たしかに個人の行動には固有の傾向があるという意味で、また遺伝や環境の影響をまったく受けないわけではないという意味で完全な選択の自由があるというわけではないが、いかなる状況においても、自由意志で主体的に決断できるというのがアドラーの考えである。このようなアドラーの自由意志論は「やわらかい決定論」(soft determinism)とすることができる。

アドラー心理学のテキストには、人間は reactor ではなく actor である、という表現をよく見ることが¹⁰⁾例えば、古くはジッターが次のようにいっている。「行動に問題があっても、刺激に反応している(react)のではなく、自分自身、進化における役割、社会における位置についての考えに応じて行為している(act)¹¹⁾。

人間は原子と違って、必然的な動きをしているわけでもなく、また時に偶発的な動きをするというわけでもない。人間を人間として、固有の精神を持った人間として見ようとするならば、目的論的に考察することは必至である。

アドラーが個人心理学は「科学」であるという時、したがって、これまでのことから明らかのように、原子論的な世界観を前提とする、あるいは、原因論に立つ還元主義的な科学ではありえないのである。

9. 自由の意味～残された問題

ジッターの場合、個人は目標追求という自己中心的な概念と、共同体感覚という利他的な概念とをどのように折り合いをつけているかといえば、人は協力的、非協力的であることもでき、自らの判断で非協力的であることを選ぶことは可能である。しかし、先の論文で示したように¹²⁾、ジッターは協力、貢献こそ本来的であると考え、非協力、非貢献はすべて逸脱と見なす。

そこで、目標追求の方向性は恣意的に決められるものではなくて自ずと一つの方向、すなわち、進化の方向へと向かうことが本来的であると決めておくのである。ただし、決められるのはこれだけであって、実際にどういう判断をすることが「善」であるかは人が置かれている対人関係などの状況とは無関係に決めることはできない。絶対の価値を状況とは無関係に決めてはいけなし、決めることはできないのである。このことについてはさらなる考察を必要とする。いずれにしても、ジッターのいうように一つの方向を本来的なものとして認めるということは、さもなけ

ればどのようなあり方をも許容されるという意味での自由とは違って一見人の行動に制限を課することであるようにも思える。原子の運動のようにすべてが必然であるということも困るがそれはそれで責任を免除されることになる。他方、まったくのアナーキーであるということが自由を保障するともいえない。

先に見たように、自分にとって「善」なることをすることは万人の願うところだが、自分がしたいことをすることが実際には自分のしたいことをすることにはならないということがある。気ままに自由に自分のしたいことに身を委ねることが、真の自由ではないことがあるのである。

アドラー心理学は時に誤解されるようなアナーキーなものではない。原子論的な世界観とは違ってアドラーの創始した個人心理学において価値がどのように位置づけられているのかさらに考察を続けることにする。

注釈

- 1) Ansbacher, Introduction. In *The Science of Living*. Garden City, N.Y.: Doubleday, 1969, pp. xiv-xv, Alfred Adler, *Über den nervösen Charakter*, Gottingen, Vandenhoeck & Ruprecht, 1997, S. 35.
- 2) *Science of Living* は『個人心理学講義』の原題である。
- 3) 「(身体の組織において) 個人は、そのすべての部分が共通の目的へと協力する共同体 (Gemeinschaft) になるように」 Adler, *ibid.*, S. 35、また、「私の場合、心理学の関心は、開業医としての経験から起こりました。開業することで、心理学的な事実を理解するのに必要な目的論的な観点を得ることができたのです」(アドラー: 個人心理学講義. 一光社、1996, p. 14-5)。
- 4) ルクレティウス『事物の本性について』第2巻、251-7行、藤澤令夫訳。
- 5) アリストテレスによる哲学史の概要を見ると、タレスからデモクリトスまでは、自然の問題が探求された。すなわち、自然の全体を統一的に説明することが可能であるような普遍的原理(アルケー)を発見することが、初期哲学者たちの関心の的であった。「自然哲学者」の後を受けて、その後、ソクラテスは、自然万有について省みることなく、人間の問題に専心したとされる。キケロは、ソクラテスは、「哲学を天上から引き下ろして人間の巷間にその居を移した」といっている。プラトン、アリストテレスは、それらの成果を総合しつつ、自然と人間の問題を切り離すことなく、総合的な視点から探求し、哲学を一個の学問として完成した。このようにアリストテレスはギリシアの哲学を見る。しかしこれはあくまでもアリストテレスの見方であって、実際には、ソクラテスが自然学に関心があったことも、他方、例えば、ここで問題にしているデモクリトスが人間の問題を扱っていたことは疑いないことなのである。
- 6) 岸見一郎: アドラー心理学入門. KKベストセラーズ、1999, pp. 123-4 など。
- 7) プラトン: メノン. 78b.
- 8) アドラー、前掲書、p. 13.
- 9) Sicher, L.: *The Collected Works of Lydia Sicher : Adlerian Perspective*. Edited by Adele Davidson, Fort Bragg, Ca : QED Press, 1991, pp. 39-40.
- 10) Dinkmeyer, Don C. et al.: *Adlerian Counseling and Psychotherapy*, Columbus : Merrill Company, 1987, p. 18. "People are not reactors ; they are actors".
- 11) Sicher, *ibid.*, p. 42.
- 12) 岸見一郎: アドラー心理学の諸問題 (1) . アドレリアン 14 (2) , 2000, 4. ジッハーの共同体感覚 .

更新履歴

2012年12月1日 アドレリアン掲載号より転載